

教宣 せぶん

被災 55 年 3.1 ビキニデー

焼き場の少年

「ビキニデー」でいただいた資料の中に、「焼き場の少年」というタイトルの写真記事がありました。原爆が投下された1カ月後の長崎で、アメリカ人カメラマンが撮った写真です。10歳ぐらいの少年が2歳ぐらいの妹をおぶって、裸足で、直立不動に、一点を見つめています。辺りは原爆によって焼け尽くされたためでしょう、何も写っていません。おぶられている妹は、疲れのためか、ぐったりと眠っているように見えました。

記事を読んでいくと、その後の少年の行動が書かれていました。「グシューとした音をして燃えていくのを少年はまばたきひとつせず直立不動で見つめ、固く噛んだ唇からは血がにじんでいました。その後、裸足のまま、何もなかったかのように帰っていきました」。

眠っていると思われた幼い妹は亡くなっており、少年はこの焼き場に妹を葬るために来たのでした。

少年はどんな思いで妹を背負ってきたのでしょうか。どんな思いで焼き場に入れたのでしょうか。そして、燃えて小さくなっていく妹を、どんな気持ちで天国に見おкуったのでしょうか。

裸足で、直立不動に、一点を見つめているその写真に、少年の気持ちがすべて映っているように感じました。とても言葉などで表現できません。一枚の写真が、戦争の悲惨さと虚しさを、伝えています。